

General Symposium

🎵 Tue. Sep 7, 2021 10:30 AM - 12:30 PM JST | Tue. Sep 7, 2021 1:30 AM - 3:30 AM UTC | 🏠 Room 2 Zoom

**Social Mission of Physical Education, Health and Sport Sciences for Young Researchers:
Reality and Romance of "Interdisciplinarity"**

Chair: Kazutoshi Fujikawa (Teikyo Heisei University), Yuhi Nakazawa (Teikyo University)

Designated Debater: Koichi Kiku (University of Tsukuba)

2021年度、本学会の名称は日本体育・スポーツ・健康学会へと変更され、第71回大会では学際的研究の推進が標榜されている。その背景には、めまぐるしく変化する社会情勢に応じた体育・スポーツ・健康科学の学術的な知が求められていることが挙げられよう。複雑・多様化する社会の課題に対して個別の専門領域で蓄積された知見を応用ないしは統合し、社会の要請と対峙していくことはこれからの研究に欠かせない要素である。若手研究者委員会においても、「学際性」を主軸として今年度のシンポジウムの企画を検討してきたが、そこで浮かび上がってきたのは学際的研究における憧憬と現実に横たわる諸々の課題である。それは言わば、若手研究者が学際的研究に対して抱く「リアル」と「ロマン」である。よって、本シンポジウムでは学際的研究に挑まれている3名の演者と指定討論者の先生方をお招きし、研究の方法やそこでの経験、さらには現在の環境に至るまでの経緯等、研究のリアルとロマンを辿りつつ、多方面から「学際性」について探求することとした。それにより、体育・スポーツ・健康科学の現在地を把握しつつ、若手研究者に課せられた社会的使命について展望したい。

10:30 AM - 11:10 AM JST | 1:30 AM - 2:10 AM UTC

[本部企画-S2-1] On the Establishment of Interdisciplinarity in the Realm of Sport Sciences

*Mizuho Takemura¹ (1. Nihon Fukushi University)

11:10 AM - 11:50 AM JST | 2:10 AM - 2:50 AM UTC

[本部企画-S2-2] Reaching to "Sport Science" by an Outsider and Reaching Outside from Inside

*Hiroko Kudo¹ (1. Chuo University)

11:50 AM - 12:30 PM JST | 2:50 AM - 3:30 AM UTC

[本部企画-S2-3] Is There Any Interdisciplinarity in the Real Research Life of A Second-Rate Judoka?

From Exercise to Martial Art, and eSport

*Takashi Matsui¹ (1. University of Tsukuba)

General Symposium

Social Mission of Physical Education, Health and Sport Sciences for Young Researchers: Reality and Romance of "Interdisciplinarity"

Chair: Kazutoshi Fujikawa (Teikyo Heisei University), Yuhi Nakazawa (Teikyo University)

Designated Debater: Koichi Kiku (University of Tsukuba)

Tue. Sep 7, 2021 10:30 AM - 12:30 PM Room 2 (Zoom)

2021年度、本学会の名称は日本体育・スポーツ・健康学会へと変更され、第71回大会では学際的研究の推進が標榜されている。その背景には、めまぐるしく変化する社会情勢に応じた体育・スポーツ・健康科学の学術的な知が求められていることが挙げられよう。複雑・多様化する社会の課題に対して個別の専門領域で蓄積された知見を応用ないしは統合し、社会の要請と対峙していくことはこれからの研究に欠かせない要素である。若手研究者委員会においても、「学際性」を主軸として今年度のシンポジウムの企画を検討してきたが、そこで浮かび上がってきたのは学際的研究における憧憬と現実と横たわる諸々の課題である。それは言わば、若手研究者が学際的研究に対して抱く「リアル」と「ロマン」である。よって、本シンポジウムでは学際的研究に挑まれている3名の演者と指定討論者の先生方をお招きし、研究の方法やそこでの経験、さらには現在の環境に至るまでの経緯等、研究のリアルとロマンを辿りつつ、多方面から「学際性」について探求することとした。それにより、体育・スポーツ・健康科学の現在地を把握しつつ、若手研究者に課せられた社会的使命について展望したい。

10:30 AM - 11:10 AM

[本部企画-S2-1] On the Establishment of Interdisciplinarity in the Realm of Sport Sciences

*Mizuho Takemura¹ (1. Nihon Fukushi University)

<演者略歴>

筑波大学大学院博士課程単位取得満期退学。博士（体育科学）。早稲田大学助教を経て現職。専門はスポーツ哲学、スポーツ倫理学、生命倫理学。

体育、スポーツ、健康科学分野における「若手研究者の社会的使命」というテーマのもと、キャリアパス・リサーチパス、研究者の社会的使命という三つのトピックについて話題提供を行う。

キャリアパスでは、現在振り返ってみて大学院時代に養うべき力について、学際性という視点から読み解いていく。とくに、スポーツ科学領域における研究方法の確立についての困難性と必要性について指摘する。

また、リサーチパスにおいては、研究活動内容について学際性という視点から事例を紹介する。現在進めている、遺伝子ドーピングに関する研究プロジェクトにおいては、生命医科学領域・スポーツ科学領域・哲学領域という領域横断的な関係性を構築して進めていることから、なぜ学際性が求められるのかという点について、社会状況に照らし合わせて説明する。

最後に、（若手）研究者の使命の一つとして、自由な個の確立について提案したい。この点は、目的合理性に陥りがちな現代社会であるからこそリベラルアーツがより重要になることや、組織内における多様性という点にもつながるものである。

General Symposium

Social Mission of Physical Education, Health and Sport Sciences for Young Researchers: Reality and Romance of "Interdisciplinarity"

Chair: Kazutoshi Fujikawa (Teikyo Heisei University), Yuhi Nakazawa (Teikyo University)

Designated Debater: Koichi Kiku (University of Tsukuba)

Tue. Sep 7, 2021 10:30 AM - 12:30 PM Room 2 (Zoom)

2021年度、本学会の名称は日本体育・スポーツ・健康学会へと変更され、第71回大会では学際的研究の推進が標榜されている。その背景には、めまぐるしく変化する社会情勢に応じた体育・スポーツ・健康科学の学術的な知が求められていることが挙げられよう。複雑・多様化する社会の課題に対して個別の専門領域で蓄積された知見を応用ないしは統合し、社会の要請と対峙していくことはこれからの研究に欠かせない要素である。若手研究者委員会においても、「学際性」を主軸として今年度のシンポジウムの企画を検討してきたが、そこで浮かび上がってきたのは学際的研究における憧憬と現実と横たわる諸々の課題である。それは言わば、若手研究者が学際的研究に対して抱く「リアル」と「ロマン」である。よって、本シンポジウムでは学際的研究に挑まれている3名の演者と指定討論者の先生方をお招きし、研究の方法やそこでの経験、さらには現在の環境に至るまでの経緯等、研究のリアルとロマンを辿りつつ、多方面から「学際性」について探求することとした。それにより、体育・スポーツ・健康科学の現在地を把握しつつ、若手研究者に課せられた社会的使命について展望したい。

11:10 AM - 11:50 AM

[本部企画-S2-2] Reaching to “Sport Science” by an Outsider and Reaching Outside from Inside

*Hiroko Kudo¹ (1. Chuo University)

<演者略歴>

イタリア共和国ヴェネツィア大学より1998年Ph.D. (公共政策学) 受領。愛知淑徳大学専任講師、早稲田大学専任講師・助教授等を経て2005年より中央大学法学部教授。中大フェンシング部長。フェンシング日本代表チームのテクニカル・スタッフとしてロンドン五輪に参加。イタリア観光乗馬協会 (FITETREC-ANTE) 会員。

「スポーツは出来ない」と周囲、特に教員から評価されていた演者は、高校卒業までは「体育・スポーツ苦手」な生徒の一人として人生最初のサイクルを終えた。しかし、自身の個人的なスポーツ経験、また、専門分野の研究との関係で得た語学や学術的な知識との幸運な組み合わせから、2010年から2015年の五年余にわたり、フェンシングの全日本代表チームの諸活動に参加する機会を得た。その際の経験、疑問、新しい知見などから、科研費の「スポーツ科学」分野において、学際的な研究を実施するに至った。この過程において、スポーツ科学の専門家、データ分析の専門家、スポーツ心理やその他の専門家と接する機会があったが、それらを統合することの必要性和同時に困難も認識した。また、スポーツ科学領域ではない公共経営などの国際学会において「スポーツ政策・マネジメント」に関する分科会を立ち上げた中で、学際連携および国際協力について見えてきたものもある。今回の報告では、これらから得られた知見を学会員と共有しつつ、国際水準と日本の相違、特に、日本の特徴や特殊性などについて指摘出来れば幸いである。

General Symposium

Social Mission of Physical Education, Health and Sport Sciences for Young Researchers: Reality and Romance of "Interdisciplinarity"

Chair: Kazutoshi Fujikawa (Teikyo Heisei University), Yuhi Nakazawa (Teikyo University)

Designated Debater: Koichi Kiku (University of Tsukuba)

Tue. Sep 7, 2021 10:30 AM - 12:30 PM Room 2 (Zoom)

2021年度、本学会の名称は日本体育・スポーツ・健康学会へと変更され、第71回大会では学際的研究の推進が標榜されている。その背景には、めまぐるしく変化する社会情勢に応じた体育・スポーツ・健康科学の学術的な知が求められていることが挙げられよう。複雑・多様化する社会の課題に対して個別の専門領域で蓄積された知見を応用ないしは統合し、社会の要請と対峙していくことはこれからの研究に欠かせない要素である。若手研究者委員会においても、「学際性」を主軸として今年度のシンポジウムの企画を検討してきたが、そこで浮かび上がってきたのは学際的研究における憧憬と現実とに横たわる諸々の課題である。それは言わば、若手研究者が学際的研究に対して抱く「リアル」と「ロマン」である。よって、本シンポジウムでは学際的研究に挑まれている3名の演者と指定討論者の先生方をお招きし、研究の方法やそこでの経験、さらには現在の環境に至るまでの経緯等、研究のリアルとロマンを辿りつつ、多方面から「学際性」について探求することとした。それにより、体育・スポーツ・健康科学の現在地を把握しつつ、若手研究者に課せられた社会的使命について展望したい。

11:50 AM - 12:30 PM

[本部企画-S2-3]Is There Any Interdisciplinarity in the Real Research Life of A Second-Rate Judoka?

From Exercise to Martial Art, and eSport

*Takashi Matsui¹ (1. University of Tsukuba)

<演者略歴>

筑波大学体育専門学群（柔道部）卒業。同大学院体育科学専攻（運動生化学）修了。博士（体育科学）。新潟医療福祉大学（学振特別研究員SPD）、スペイン国立カハール研究所神経生物学部門を経て2015年より現職。全柔連科学研究部基礎研究部門長、筑波大学スポーツイノベーション開発研究センタースポーツIT分野長を兼務。

哲学者ロラン・バルトは、「真の学際性は、1つのテーマを選びそのまわりに2、3の諸科学を集めるだけでは不十分で、どの学問領域にも属さない新しい対象を生み出すところにある」という。

私は二流柔道家としての競技生活を送った。競技につきものである疲労の正体を暴き、なんとか克服できないか。その思いひとつで学生時代から動物実験に取り組み、ポストク時代に細胞実験を取り入れ、今はそこに進化生物学的視点も盛り込みながら、運動疲労要因としての脳グリコーゲンの役割とそれを踏まえた疲労予防策を究明する「スポーツ神経生物学」を進める。

現職では新たに「柔道生理学」を開始し、今は武道の教育的効果に生化学で迫る「自他共栄の科学」に挑戦中である。「バーチャルスポーツ」としてのeスポーツが柔道や武道の教育効果をどこまで再現するのかにも興味が尽きない。

神経科学の父であるラモニ・カハールは、脳細胞を顕微鏡で観察する傍ら、天体望遠鏡で宇宙の星々を見つめ、この世界と人間の構造と機能に思いを馳せたという。一見無関係なものになぜか惹かれる。そうしたところで学際性は生まれるのかもしれない。体育学には昔も今も学際的な場であり続けて欲しい。